

高橋紘氏の遺稿『人間 昭和天皇』の背景

所 功

人と人との出会いは、偶然かもしれない。しかし、不可思議な宿縁というほかないこともある。高橋紘氏と私との出会いも、その一例といえよう。

ここでは、彼との二十数年にわたるプライベートな交流を通じて知りえた逸話を織りまぜながら、遺作『人間 昭和天皇』(上・下)が完成されるに至る背景の一端を紹介させて頂こう。

岩波新書『象徴天皇』

高橋紘氏は、昭和四十年(一九六五)、早稲田大学法学部を卒業後、共同通信へ入社して社会部に所属。同四十九年から宮内記

者に籍を置いた。それ以来、単に仕事として皇室を取材するだけでなく、自身のライフワークとして現代の天皇の研究に取り組んだ。とりわけ昭和天皇に関心を寄せ続け、その集大成として『人間 昭和天皇』を完成させ、満七十歳寸前(昨年九月三十日)に天国へ旅立ったのである(彼はカトリック信徒)。

私が同氏を知ったのは、①出世作『現代天皇家の研究』(講談社)および②鈴木邦彦氏との共著『天皇家の密使たち——秘録・占領と皇室』(現代史出版会)を読んでからである。両方とも新聞記者ならではの徹底した取材(資料発掘)に基づく研究成果が、平明な文章で綴られている。

しかし、それ以上に感銘を受けたのが、昭和六十二年(一九八

七) 四月刊の③『象徴天皇』(岩波新書)である。本書は現行憲法のもとで続いている象徴天皇制度を的確に説明するだけでなく、それを具体的な取材実話などで肉付けしながら、その全体像を見事に描いている。

そこで、奥付の著者紹介に「一九四一年生まれ」とあることも興味をそそられ、愛読者カードに寸評を書き岩波書店へ送った。すると、まもなく大学へ電話があり、拙著『日本の年号』(雄山閣出版)についても尋ねたいことがあるから会いたいといわれ、上京の折に日比谷のプレスセンターで食事を共にした。

その時、彼と私の生年月日が全く同じ(昭和十六年の十二月十二日)ことが判った。ちなみに、この十二日には、八日より始まった先の大戦が閣議で「大東亜戦争」と命名されている。そんな折から、彼は「八紘一字」というスローガンに基づき「紘」と名づけられ、また私は将来徴兵されたら勲功をあげよとの思いをこめて「功」と名づけられたのであろう。

それ以後、私は彼を「紘さん」と言い、彼は私を「所さん」と呼び、まさに兄弟のような付き合いを続けてきた。そのおかげで、私は従来あまり知らなかったマスコミや出版社などの人々と出会うことができ、また紘さんに学界や神社界などの人々を引き合わせることもできた。

永積寅彦『昭和天皇と私』

この感動的な初対面の後まもなく、昭和天皇(八十六歳)が突如入院して癌の手術を受けられ、さらに一年後(昭和六十三年九月)に大量吐血、それから一一日後(翌六十四年一月七日)満八十七歳八ヶ月余の生涯を閉じられた。この一年数ヶ月、共同通信社会部デスクの紘さんは、Xデーに備えて熾烈な取材合戦の陣頭指揮をとり、超多忙であったにちがいない。

しかも、その間に、大事な資料を世に出している。一つは、戦後しばらく侍従次長を務めた木下道雄氏の日記が残っていることを突きとめ、遺族と粘り強く交渉して諒解をとりつけ、昭和天皇の崩御直後に特ダネとして共同から全国に配信した。のみならず、それに詳細な解説と的確な脚注を加えた④『側近日誌』(文藝春秋)を完成している(その解説部分を再編したのが角川文庫『象徴天皇の誕生』)。

いま一つは、私が昭和六十三年八月、新人物往来社から『別冊歴史読本』で「昭和大礼」の特集企画を頼まれたので、六十年前の即位礼と大嘗祭に奉仕された永積寅彦氏に体験談を拝聴したいと思い、都内の御宅へ参上した。すると、それまで口外されなかった昭和天皇との八十年に亘る思い話を話して頂けることになっ

たので、次回から紘さんを誘い永積邸へ通った。

京都で勤めていた私が何故そんなことを為しえたかといえば、今回の遺作（上七三頁）に、「所は、その日」にそなえて、NHKで元号や代替りの諸儀式を解説するため、都内のホテルでかん詰め状態、京都と東京を行ったり来たりの毎日だった。……その合間を縫ってのインタビューである。……十五回ほど続けられ……一回が一時間半から二時間だった」と記されている。そのインタビューのテープは、紘さんの親友（浅見雅夫氏）に協力をえて毎回ワープロ化され、永積氏に再検討してもらい、のち学習研究社から『昭和天皇と私』の題で出版させて頂いた。

それ以外にも、紘さんは数年前に鈴木邦彦氏との共編で出した昭和天皇の記者会見記録を再編増補して解説を加え、⑤『陛下、お尋ね申し上げます』と題して文春文庫に収め、さらに平成元年（一九八九）新しく⑥『昭和天皇発言録——大正九年—昭和六十四年の真実』（小学館）を編纂している。このような基本史料が今回の遺稿にも活用されていることは、申すまでもない。

文春新書『皇位継承』

その後十数年間に、紘さんは⑦『天皇家の仕事』（共同通信社）、

⑧『昭和天皇1945—1948』（岩波現代文庫）、⑨『象徴天皇と皇室』（小学館文庫）および⑩共著『皇位継承』（文春新書）、⑪共編『昭和初期の天皇と宮中』（岩波書店）などを、次々出版している。

このうち⑨は、竹前栄治氏監修「シリーズ日本国憲法・検証〔2〕」として憲法の条文に即しながら「あるべき天皇像」を具体的に論じた書き下ろし。また⑪は、栗屋憲太郎・小田部雄次両氏らとの共同研究により、「河井弥八日記」を翻刻し詳細な解説を加えたもの。共に学術的な評価が高い。

さらに⑩『皇位継承』は、私との共著である（平成十年十月刊）。これは紘さんが文藝春秋社の新企画「文春新書」の第一号として引き受け、途中から私に片棒をかついでくれといわれて、約半年で仕上げた。私は前半で「万世一系」「女帝」の来歴と明治「皇室典範」の成立史を論じ、彼は後半で「御側女官」「昭和天皇」の実像と戦後「皇室典範」の問題点を書いたのである。

両者の見解は大筋共通しているが、細部で対立した。私は元号を優先し皇室に敬語を使うべきだと主張し、彼は西暦で統一し敬語も不要だと反対する。結局、編集長の白川浩司氏が間を取り持ち、年代表示は元号（西暦）、敬語は不使用と決まった。

その過程で二人とも真剣に心配したのは、もし現行典範のよう

な(イ)皇位継承資格を「男系の男子」に限定し、また(ロ)天皇・皇族に「養子」を禁止し、さらに(ハ)「皇族女子」が一般男子と結婚なされば皇室から除外する、という三重の厳しい制約を続けていたら、やがて皇室が衰退し滅亡してしまいかねないことである。それゆえ、将来的に(イ)女帝・母系天皇も(ロ)皇族養子も(ハ)女性宮家も容認するような典範の改正が必要だと主張してきたのである。

三者共著『皇室事典』

それから数年後(平成十七年)、小泉内閣のもとで「皇室典範有識者会議」が一年近く開かれ、私もヒアリングで管見を述べた。その報告書の結論は、(イ)女帝・母系天皇も(ハ)女性宮家も公認するのみならず、継承順位は直系長子を優先する、という絃さんの見解に近い。それに対して、私は継承順位のみ皇子・皇孫の間で男子優先とする方が穏当だと唱えた。

しかし、いわゆる保守論壇の中では「男系男子こそ万世一系」との主張が強い。しかも、翌十八年九月、秋篠宮家に悠仁親王が誕生されて、次の次の次まで「男系の男子」により継承が可能な状況を迎え、典範改正論議は立ち消えになった。

けれども、私は歴史家として、また絃さんは現場ジャーナリス

トとして、このまま漫然と推移してよいはずがない、との思いを持ち続けた。そこで私は、文部省在任中に同僚だった美和信夫氏(故人)と計画を試みたことのある『皇室事典』を作り、多くの人々に皇室の歴史と現状をトータルに理解してもらう必要があると考え、絃さんに相談して即座に賛同をえた。

ただ、事典の編纂には面倒な作業が多く、また出版社が乗り気にならねば出来ない。そこで、それ以前から京都産業大学日本文化研究所の月例会にも参加していたモラロジ―研究所の橋本富太郎氏に、基礎的な資料作成などの協力を求めた。また、出版社は数年前に拙著『京都の三大祭』(角川選書)の編集を担当した宮山多可志氏が角川学芸出版の重役となり、この大事業を快く引き受けてくれた。

しかし、よりレベルの高いものとするには、優秀な研究者の結集が必要と考えた。そこで代表編者には、絃さんと私と共に両者の畏敬する米田雄介氏(宮内庁書陵部編修課長・正倉院事務所長)などを経て神戸女子大学教授)が加わり、また執筆者として私の関係で京都の竹居明男・五島邦治両氏、米田氏の関係で東京の西川誠氏、絃さんの関係で静岡の小田部雄次氏などが、各々専門分野を分担することになった。

それから約四年かけて原稿が出揃い、代表編者二人で何度も検

討を加え、ようやく平成二十一年五月、大婚五十年記念の意味もこめて刊行することができた。その間に三者で激論したことも少くないが、紘さんは言うべきことを強く言いながら、「あとは所さんにまかせるよ」とか「編集者の立場も考えなきゃな」と気配りする。そんな紘さんが益々好きになった。

『人間 昭和天皇』と偲ぶ会

この『皇室事典』が出た約一年後、紘さんは三十数年にわたりライフワークとして現場で直接取材し丹念に調査研究を続けてきた膨大な資料を活用して、「俺にしか書けない昭和天皇伝」の執筆に取り組み始めた。

けれども「五十枚ほど書いたところで食道ガンが発見され」、それから約一年間、五回も入退院を繰り返して、昨年「九月十日」付の「あとがき」を講談社の横山建城氏に渡し、その二十日後に永眠した。

その間に私は何度も電話とファックスで質問を受け、夏前に声が出なくなっただけではメールを交わした。しかし、見舞には絶対に来てくれるなどいわれ、カラオケとゴルフで鍛えた元気な紘さんのイメージを持ち続けている。明けて新年一月十七日、プレス

センターで催された「偲ぶ会」に飾られた遺影は、二十八年前の初対面と同じような笑みを満面にたたえており、各界から馳せつけた三百名近い参加者を魅了した。

その偲ぶ会の発起人は、共同通信幹部三名と研究仲間の粟野憲太郎・保阪正康両氏など、また「送ることば」は猪瀬直樹東京都副知事・小田部雄次静岡福祉大学教授などと共に、私も上述のような想い出の一端を述べた。

この席で来賓代表の挨拶に立たれた渡辺允前侍従長は、父君が昭和天皇の御学友でもあったから、紘さんがしばしば訪ねていたこともふまえて、「今回の遺作は、人間昭和天皇を心から敬愛する人間高橋紘さんが、現場主義に徹して、正確な記録を基に描き上げた見事な作品」であり、また上下の巻頭に「妻みさ子に捧げる」と明記する紘さんの心やさしさに見事な賛辞を贈られた。誰しも同感である。

なお、紘さんの膨大な愛蔵書、貴重な取材記録は、御遺族の御好意によりモラロジー研究所へ一括寄贈されることになった。それに私の寄贈本なども併せて「皇室関係資料文庫」（仮称）を構築し、それを内外の皇室研究者などに公開することが、紘さんの遺志にも叶うのではないかと考えている。

（平成二十四年一月三十日稿）